夜のクロス

辻森　潤

（糞みたいな人生）、最近、津田俊輔はそんな言葉を頭に浮かべるようになった。考えてはいけないと思いながら、そんな捨て鉢な言葉を思い浮かべる自分自身に嫌気が差した。（今までこんなことはなかったことだ、いつまでこんな生活を送っているんだろう）彼はそう思った。彼はなぜかしら孤独に蝕まれていた。理由のない寂しさが押し寄せてくる。

津田は臆病で神経質な人間なので、夜、蒲団に入って静かに目を瞑っていると（実はなかなか眠れないのだ）、真っ暗な宇宙にちっぽけな地球が浮かんでいる姿が目に浮かぶ、宇宙は果てのあるものなのか、もしあるとすればその果ての先はどうなっているのか、時間は永遠に継続するものなのか、宇宙そのものも実は被膜の表面に映るはかない映像のようなものかも知れない、では被膜の奥にあるものは、そんなことを次々と考えていると益々眠れなくなってくる。津田は子供の頃からある映像が頭に焼き付いていて、それが憶い出したように浮かんできて彼を苦しめた。飾りのない平板な壁に包まれた広い部屋があって、明かりに照らされた中央に大きなデスクが一つ置かれている、デスクの脇に恰幅のいい初老の男が立っている、男は肘を曲げて胸の辺りに片腕を差し上げ、わずかな隙間を空けて手のひらの上に浮いた小さな球体を見つめている、ちっぽけな球体そのものが宇宙であり、その中の超微細な塵のようにして地球があり、さらに無に等しいような自分がいるのだ。この映像というか、しみ付いた記憶に等しいものは津田が歳を重ねてからも時々顔を出す。今夜もこいつが現われて彼を苦しめた。この広大無辺の宇宙の、さらにちっぽけな地球の、ちらにちっぽけな島国の一点に自分がいる、そんな自分の存在とはなんなのか、そして自分は間もなく、宇宙的な規模で言えば瞬間的に死ぬのだ、死んだあとはどうなる、そんなことを考えていると底無しの恐怖に襲われる、胸が苦しくなり気分が悪くなってくる、こんな重大な厳然たる事実を目の当たりにしながら、よく世間の人々は日々平然と生きていられるものだと思う。もっとも、こんなことは考えてはいけないことなのかも知れない、日常においては考えないで忘れていられるから人は生きていけるのだろう。よ

しんば地球的な規模で見て、自分があと二十年くらい生きられるとしても、いずれ自分は死ぬのだ、そして限られた二十年と言う短い時間を、この瞬間、この瞬間、刻一刻と死に向かって食いつぶしているのだ。

また眠れなくなる。

津田は言いようのない焦りにも蝕まれていた。限りある生を生きる一個の貧弱な生物体として、自分にはこの先どれほどの時間があって、どれほどの本を読み、どれほどのものを見聞きし、新たな知識を得られるのだろう。例え平均的に生きたとしても、それはとても卑小なものに過ぎない、どうあがいたところで到底人類の過去の記憶に追いつけない。しかも事故や病気によって、突然死がやってくることもあるのだ。津田は生きている内に、出来るだけ多くの本を読み、多くのものを見たいと思った。そのことが生きる目標であり、楽しみであると思った。

津田は日を追うごとに焦って行った。

本を読んだり画集を見ていると、そこには詩人や小説家或いは画家などの名前と伴に、その人の生年と没年が出てくる。津田はページを繰ってそれが見つかると、真っ先に生年と没年の数字に目をやるようになった。彼は早速何歳で死んだか単純な引き算をしてみる。その数字が少ないとなぜかホッとする。（こいつもか）と思う。その気持には裏があって、人はいつ死ぬか解からない、人の生涯は短いんだ、だから今すぐにでもつまらない仕事を止めて、自分がほんとうにしたいことをするべきだ、そうした日頃感じている彼の気持を裏付けている気がして、たぶん彼はやはりそうなんだという気持になるんだろう。

余りにも度々こうした思いが立ち現われるので、津田は自分自身の中で起こってくるこ

の思いに対して、半ば親しみを込めて（あいつ）と名付けた。
津田は今年で五十三になる。二十歳になる一人娘とは日常の用を足す短い会話以外に話しらしい話しをしたことがない。妻は週に二三度は家を空けて帰ってこなかった、そんな妻を放っておける自分とは一体なんだろう、確かに妻が外泊をしだした当初こそなにか言わなければと何度か思ったことはある、或る晩のことで、そのときはいつになく早い九時頃に帰ったのだが、マンションの扉を開けると家の中の雰囲気が妙なことを直感的に察知した、玄関脇の電燈の消えた部屋に一人の若者が立っていた、妻は少し緊張した風で若者と顔を見合わせていた、安っぽい背広を着込んだ若者はろくに挨拶もせずにそそくさと家を出て行った、しばらくして妻があとを追うようにして出て行った、たぶん表で立ち話でもしているのだろう、三十分ほどして妻は戻ってきた、意外に平気な顔をしていた、そのときでさえ妻を問い詰めることさえしなかった、でもこの頃では邪魔をされない一人の時間を持てるので、自分はかえって助かっているのではと思うこともある。第三者が見たらとても畸妙で、なんと不甲斐ない男だろうと思うかも知れない、でもそんなことより平気でいられる自分という人間が、ふと通りすがりの鏡に映った卑屈に歪んだ自分の横顔を見たときのように、おぞましく思えることもある。ふだんは知覚しないでいる自分の正体を見せられ、重苦しくのしかかるのだ。でもそれもわずかな時間のことで、また忘れる。その反面、女の肌が欲しいと素直に思うことは時々あった、しかしそんな自分が不幸であるとは感じなかった。幸、不幸という感覚さえも倦んだ日常の中で麻痺し埋没してしまっている。幸、不幸、それは忘れてしまった遠い感覚に過ぎない。
津田はもし自分が会社を辞めたとしたらと考えた。当然催されるだろう送別会のことを

考えた。彼は人が集まる付き合いは好きではないので出来れば行きたくはないが、当然何食わぬ顔をして招待を受けるだろう。その席上で、何人かの上司や知人が送辞とやらを述べたあとで、彼は挨拶を求められるだろう、自分はどんなことを話すんだろうと考える、あれこれ考えた末にこんな言葉を選んでみた。

（思うことはたくさんありますが、今それを話してみたところでなんの意味もありません。感謝の念だけをお伝えしたい。どうも御世話になりました。）

そんな場面を想像して多少愉快な気分になった。津田は色々言いたいこともあったが、それは仕事に未練を残している証拠になるだけだし、綺麗に終わらせたいと思った。黙ったまま誰も気が付かない内にふっといなくなる、そんな終わり方が出来れば理想だと思った。その反面、自分が取るかも知れない行動が、家族からしてみれば自分のことしか考えない身勝手な振る舞いであることも解かっていた。しかし、このままただ働いて悪戯に時間を潰して死ぬのは辛かった。

朝、会社に出かける時刻も遅くなった。いつまでも蒲団の中でぐずぐすしている。到底始業時間には間に合わない。津田は毎朝駅のプラットホームで缶コーヒーを飲むことにしている、いつ頃からこんな習慣が始まったのだろうか、もう二・三年になると思う。ホームの喫煙コーナーに立って、電車を待つオフィスレディを眺めたりしながら、缶コーヒーを飲み煙草を吸う、ときには隣りに若い女性がきて煙草を吸うこともあった、時間にしてわずか五分か十分のことだがこのわずかな時間が楽しい。このことだけを楽しみにして毎朝会社に出かけている気がする。蒲団の中でホームで飲む缶コーヒーのことを想い、勇気を奮い起こして起き上がる、こんなことは単に自分が怠け者であるだけのことかも知れない。

津田の仕事場は坂の上の住宅の建て込んだ場所にあった。横丁を曲がると路地の脇には桜の若木が一列に並んでいた。その桜の並木に沿って立つ硝子張りの洒落たビルで、斜面だらけの土地のせいか、四階建ての建物全体が表の道路より一段低くなっていた。仕事に

追われて深夜仕事場を出ると、まずわずかな傾斜になった路地を何度も曲がりながら徐々に下って行く。やっと車が擦れ違うほどの道に出て、そこからは一気に下って谷底になった坂下に辿り着く。左に曲がるとコの字型をした長い歩道橋があって、歩道橋の見える辺りから人の流れが激しくなる。歩道橋を渡ると若者たちが集まり深夜でも騒音の絶えないターミナル駅の周辺に辿り着く。

毎日坂を上がり下がりしていると足腰に堪えた。体の芯まで力を使い果たして搾り果てて行くような疲れに襲われた。夜中眠っていると、突然太ももの筋肉が攣って苦しむこともしばしばだった。津田はこんな歳になった自分自身を実感した。それでも彼は毎日同じ手続きをきちんと取るように、同じ順序で坂を下って行った。人や車を避けながら歩いていると（あいつ）が立ち現われた。（あいつ）は帰りがけの疲れ果てた時刻を好んで現われた。その瞬間から津田は深く沈潜して行く。（もしあなたがあと数年で死ぬとしたら、そのとき、つまり死ぬとき思い残すことはないか）、彼は毎日仕事場で顔を合わせている、固定された安心した顔をしている一人一人に聞いてみたい衝動に駈られた。面倒そうな仕事の話しを聞いているとき、懸命に説明する相手の顔を見ながら彼は頭の中で呟いていた、（あなたも死ぬんでしょ・・・）。彼はずっとそのことを、死ぬときのことを考えてきた、ここ数年そのことばかり考えている。

（夜になるまえに・・・・、夜になるまえに・・・・）津田はレイナルド・アレナスの書いた小説のタイトルが気に入って、この言葉を繰り返し呟いた。レイナルド・アレナス、二歳のとき裸のまま地面に前かがみになって、地面に舌を這わせていたという貧農の息子。

夜になるまえに、そう、すべてがふっつりと途絶えた漆黒の闇に入るまえに。

津田は夜という言葉を、同性愛者という理由でアレナスを咎め追い詰めた、キューバのカストロ政権による恐怖政治の時代というより、やがて個人的に彼にやってくる死と重ね合わせていた。彼は人々の無関心に晒されながら、亡命先のニューヨークの狭いアパートで自ら命を絶ったのだ。

その日は珍しく早く仕事が片付いた、と言うか、予定していた幾つかの打ち合わせが延期になって、急に手が空いてしまった。こんなこともあるのかと津田は拍子抜けした気持になったが、取りたてて急ぐ用事もなかったので夕暮れどきに仕事場を出た。

電話のベルが鳴る、相川京子は家に自分一人しかいないことに気付く、母親は今しがた買物に出て行ったばかりだ、彼女は廊下に出て玄関脇の小机に置かれた電話に向かう、薄闇に包まれたひっそりと湿った空間に刺々しいベルの音が鳴り続ける、玄関のドアに向かい合って上がり口に立つと、自分を包む薄暗い立方体の闇に向かって、少し隔たった玄関のドアに嵌められた四角いすり硝子越しに、白っぽい薄暮の明かりがぼんやりと滲んでくる、彼女はその距離を遠いと感じた。夕暮れに取り残された薄明たちが、すり硝子の向こうに身を寄せ合いひそひそ話しをしていると彼女は感じた。彼女は硝子の裏に身を潜める幾つもの囁きを聞くと伴に、自分との隔たりを強く意識した。

受話器を耳に当てると弾んだ雄二の声が聞こえてくる、いつもながらの几帳面な言いまわしだ、明日講義のあとで落ち合う場所のことを言っている、彼女はどうでもいいような曖昧な了解を与える、京子は大学の文学部に通っている、児童文学の研究サークルに参加しているが、自分でもどうしてそんなことをしているのか良く解からない、小柄でどちらかと言うと思春期の少女っぽい面影を残している、ショートカットにした黒髪と不意に瞳を見開いて相手を見つめる癖とがそんな印象を与えるのかも知れない、京子はふだんから口数が少なく両親のことや家族のこと、そしてなりよりも自分自身のことをあまり話したがらない、雄二にはそれが不満に思え不安でもある、しかし彼女は雄二を突き放すわけではなくどこか曖昧な感じて付き合い続けている。

京子は受話器を置くと廊下を伝って自分の部屋に戻った。壁際の机に向かって半身になって腰を下ろすと、ジーパンの両足を真っ直ぐに投げ出し片腕を机の端に置いた、部屋は出て行ったときの窓辺の濁った白さと薄闇が混ざり合ったままだ、しばらく経って机の上の電気スタンドを点けると無雑作に書きかけのノートを開く、そして真っ白なページの片隅に走り書きをする。

（恋人が欲しい。そしてその人にはほんとうのことだけを話してあげよう。なんのこだわりもなく、ほんとうのことを話す。かって、それほどまで深く、人の心に触れたことがないから。）

板を打ち付ける激しい金槌の音、コンクリートに投げ出されて響き会う金属パイプの音、時折低いうなり声を立てるクレーンの音、そんな音が混ざり合い足元から立ち昇ってくる、五階にある部屋のベランダに向いた硝子戸の前に立ち、高木優作は眼下にあるマンションの工事現場を見つめる、そのあと視線を移してまだ一階部分しか出来ていない工事現場の向こうに乱雑に広がる町並を眺める。

高木が誰であるか、それはどうでもいいことだ。とっくに気持の離れている妻と二人きりで暮らしている六十半ばを過ぎた老人のことなど、誰も気にかけてはいないし、もし気にかけている者がいたとしても、それはおざなりの決まり切った規則に従っているに過ぎない。

暮れなぞむ空は一面の灰色にそまり弱々しい残照が路地裏の片隅に留まっている、気の早い家の窓には薄ぼんやりとした電燈の明かりが覗いている、高木は工事現場の音が止むのを待っている、彼等が工事を止めて陽に焼けた顔をタオルで拭い、作業服についた埃を

払い、身支度をして家路に着くのを待っている、彼等がちりぢりになり帰って行く姿を眺める、いつものことだ。高木はそののんびりとした光景を眺めるのが好きで、帰る時刻になるのを待つのが日課になってしまっている。彼の毎日にとって、それしかないと言ってもいいほどだ。そこには単純であることの強靭さがあり、繰り返し行われることの明るさがあると思えた。単純な繰り返し、高木は単純であることにすべてを賭け、その中に全身全霊を埋没させようとする。作業員たちの姿が全員消えてなくなり、金属パイプや角材が散乱したままの無人の工事現場を眺め終えると、高木はいつも通りに夕方の散歩に出かける。残り少ない人生を賭けるにしてはずいぶん停頓した暮らしぶりだと思う、焦っても仕方ないのだ、鈍重でも愚鈍でも進んでいればいい、そう思っている。

路地になった緩い坂を下っていると、まわりに漂う薄明るさがそうさせたのか、津田は突然、今まで訪れたことのない場所に行って見たい衝動に駈られた、このまま同じ道順を辿って行くことに言い知れぬ抵抗を感じた。こんなことは誰にでもあるものだ、ちょっとした気紛れみたいにこいつは平凡な繰り返しの中に顔を出すのだ、シャーウッド・アンダーソンは自ら経営する塗料会社で口述筆記の最中、突然姿を消した、そして四日後に別の土地で朦朧とした状態で発見された、その土地は人里離れた不毛の乾燥地であると信じたい、彼はそのあと、家族と仕事を捨ててシカゴに出て文筆活動に専念するのだ。津田は別の道を行ってみようと思って脇道に逸れた。道路を横切って最近出来たタワービルの前に差しかかると、ビルの正面の空地でラジカセの音楽に合わせてダンスの練習をしている数人のグループがいた。ビートの効いた乾いた音、前後左右に突き出されるように振れる手足。若い男女が混ざり合い横一列に並んだその前を黙々と通り過ぎた。路面はアスファルト舗装ではなく舗石が丁寧に敷き詰められていた。新しい敷石の流れに乗って、ビルの脇から背後にまわり込む急な坂道を下って行った。足を降ろすたびに敷石の表面の硬くいびつな感触が足裏に伝わってくる。いつの間にか足の回転が早くなって坂の底に吸い込まれて行きそうなスピード感に襲われた。途端に足裏の冷たい刺激からむずむずとした軽い戦

慄が這い上がってきて、それはなにかぬめっとした感触に成長しながら体の芯にしみ渡った。ビルの外壁に沿って何度か曲がる内に、道は段々と狭くなって、このまま行くと寂びれた横丁に入り込んで行きそうな予感があった。密集するビルの壁はどれもしみ跡の積もった薄汚れた相貌をさらけ出し、角が当って刺々しかった足元の敷石も、いつの間にか丸みを帯びて穏かになった。その内に周囲を壁に囲まれた短い路地に入り込んでしまった。奥の壁に突き当たった片方の角から、薄明かりが斜めに生えた手足のように這い出していた。そのせいか、壁に隠れた向こうにも路地が折れ曲がって続いてそうに見えた。はたして突き当たった角を曲がると、直ぐそこに短い石段があった。その石段を降りると小さな広場に出た。

誰もいない路地裏の広場は、薄闇になじんでいく棟続きの石壁に囲まれ、足元には赤茶けてしみだらけの敷石が広がっていた。何気なく四角い広場の片隅に目を向けると、石でできた小さな噴水があった。腰の高さほどの台の上に円形の水盤が載せられ、水盤の中心から伸びた円錐形の石の先からわずかな水が噴き上がっている。津田は噴水に近づくと、一定のリズムを刻む水音を聴きながら、一筋の水の上で戯れる小さな水玉を見つめた。その瞬間、津田は生々しい水の匂いを嗅いだ、小舟の船べりをやさしく打つ薄影をまとった滑らかな水を見た。そのあと、小島がなだらかなシルエットを浮かべた夕暮れどきの湖水の情景が眼前に覆い被さってきた。津田は相変わらず船べりを打つひそやかな波音を聞き続けている。そしてその波音は、目の前にある小さな噴水の水音と重なり合い、微妙に同期を取ったまま揺れていた。

薄暮、現実と非現実の境域が迷い込み混ざり合う、畸妙に優れた時間帯だ、繋ぎ止めるものはなにもない。車の警笛が追い立てるように響き会う、薄蒼さの滲んだ薄明がぼんやりと漂い、圧倒的な灰色がすべてを包み込む、帰宅時の民衆のざわめき、粉塵を巻き上げる車の流れ、ウィリアム・バトラー・イェイツが足早に舗道を進んで行く。二十三歳、精霊の力で夢の中で結婚するしかないと彼が言ったモード・ゴンに出会った歳だ。なんのために、こんなに急ぎ足で歩かなければならないんだろう、別に目的や約束があるわけでもないのに、自らを疲れさせ麻痺させるために、自らを追い込むように、ただひたすら歩き

続ける。彼は今しがた別れてきたモード・ゴンの面影から逃れるために歩き続けていることに気付いている、ただそれを認めたくないのだ、求めても求めても得られなかった人、彼女は詩人の瞳を覗き込むと、そこに映っている自身の姿を認めた、ただその瞳があまりに真剣であったために、怯えるように泣きながら立ち去って行った。打ち明けてはいけないことを口にした男、それが彼だ。

彼は大通りを脇に入り、赤煉瓦の塀が続く裏通りを進んで行く、何度か角を曲がったあと、人気のない通りに面した小さな公園の脇に出る。

薄闇に包まれ誰もいなくなった公園に取り残された噴水に、何気なくイェイツは目を向けた。四角い溝の中心に石の台座が据えられ、一筋の噴水が台座の中央から立ち昇っていた。イェイツは台座の前に進み出ると、空中の一点を見据えたまま動かなかった。

灰色の街角で微かな水音を聴き取り、振り返ると、吹き上げる一筋の噴水の頂点で見事にバランス取って戯れる水玉に驚き、水の匂いを、彼の奥底に横たわる水の記憶を呼び醒ましたイェイツは幸いである。彼は故郷スライゴーの湖水に浮かぶイニスフリー小島に渡って、小屋を立て、畝を耕して暮らそう、明日にでも行こうと謳った。津田はイェイツがロンドンの街角で出会った気持に近づき、触れようとした。だがしかし、津田はイェイツが感じたものに浸り切ることが出来なかった。

誰もかもがこのような幸福を持っているとは限らない、ましてや遠くにある水音を聴き続けていることなど。自分は帰るべき水の記憶も故郷も持たない。そのことが津田を引き止め立ち止まらせた。

そう感じながら、津田は広場の片隅に立ち止まって、薄闇に潜んで遠ざかって行く水音

を聴き続けていた。

前の日ほどではなかったが、その日も比較的早く仕事が片付いた。日が沈み始めていて、津田が仕事場を出たときには薄明るい潤んだ光が周囲に漂っていた。路地の緩い傾斜を抜けて、急に下って行く坂道にさしかかった。

正門の石柱に背を凭せ掛けて雄二がじっと立っている。時折腕を組んだり足元に視線を落としたりするが、姿勢は崩さない。待ち始めてから既に三十分ほどになる。

脇から雄二の短い声が聞こえ、立ち止まると、門柱に凭れたまま横目でこちらを見ている雄二の顔があった、微かな含み笑いをこらえている雄二の顔を眺めていると、昨日曖昧な返事をしたせいできっと気になってわざわざ迎えに来たのだろう、雄二らしい、京子はそう思った。正門前の長いだらだら坂を下って外濠に懸かった橋を渡ると、高架鉄道の駅前に出た。煮込んだような甘ったるくこもった臭いが、いつもと同じように周囲の壁や地面にまでしみ付いているのを京子は感じた。車が激しく流れる埃っぽい大通りに懸かった高架線のガードを潜ると、線路沿いの路地に曲がった。高架線の土手で陽が遮られ、夕方前の斜めに延びた影が路地の地面に長く這っていた。そのまま奥に進むと、なじみの喫茶店の重い硝子戸を押した。

入って直ぐの地下一階に降りる階段を進むと、いつもの壁際のソファーに腰掛ける。古めかしくてやたら重そうなソファーに張られた薄茶色のビロードが、黴臭いくぐもった湿気を伝えてくる。ああ、いつもの臭いだ、そう思っていると無頓着そうな雄二の声が聞こえてくる。

「昨日十時頃、駅前の居酒屋に飲みに行ったんだ、一人で飲んで自転車に乗って帰ってくるとき、なんだか気分が悪くなって自転車をこぎながら吐いちゃった。」雄二はきょとんとした目でこちらを見ている。

「丁度パトカーに乗ったおまわりに見つかってひどく説教されたよ、やっぱり自転車でも飲酒運転になるのかな。」

京子はその話しを聞いて間が抜けていると思いながらも、雄二の素直な性格が出ているようで、夜中の道路を自転車で疾走しながら吐く雄二の姿を思うと面白かった。しかし内心ではそう思いながらも、微かに口元を緩めただけで表情は変わらなかった。雄二の話しに対して京子はなんのコメントも返さなかった。そのあとも直ぐに気持がうわついてしまい話しに身が入らなかった。一時間ほど時間を潰して、ガード下の改札で雄二と別れたあと電車に乗った。乗り換え駅で降りると、郊外の家に向かう私鉄の連絡口には行かずに、南口の階段を降りて地上にある広い改札口を出た、別に理由はなかったけれどとりとめもなく流れて行く人の渦にうずもれてみたい気がした。

津田は振り向いて後ろから来る車をやり過すと、坂道を横切ろうとして道の中央に出た。その途端に、勢い良く通過する冷たくて濃密な流れを浴びたように感じた。津田の体中を過ぎて行く濃密な流れが、夕暮れの赤錆びた残照を受けてぬるっとした白銀に光ったかと思うと、白く濡れた煌きからあのぬるぬるとした感触が這い出し、津田の体を伝って頭をもたげ始めた。振り払おうとして、俯いたまま思わず足を早めた。狭い坂道を下りきって左手にある歩道橋を渡ると、駅前の雑踏に辿り着いた。そこではふだんとなにも変わらない錯綜する人の流れが渦巻きながら続いている。津田はビルの乱立する雑然とした風景を眺めながら、少し安心した気分になった。その頃には彼をくすぐり始めたあのぬめっとした感覚も消えていたのだ。駅に続く広場では、オリエント趣味の安っぽい装身具を地面に並べて売っている若者がいたり、バイオリンとドラムでジプシー風のダンス音楽を奏でている外国人コンビがいたり、そうかと思うと、たった一人でギターを弾きながら自作の

歌を叫んでいるよくあるパターンの若者がいたりする。脇に目をやると、ビルの壁に肩を凭せ掛けてなにかを待っていそうな娘の姿が目に入った。娘はピンクのショートパンツから這い出した長い素足を、これ見よがしに交差させている。津田は間断なく揺れ動き溢れ出る人の群れを避けながら進んで行った。

（自分はこの広場と引き換えに、孤独を買っている）そう思った。そして広場の中央まで来たとき突然立ち止まった。津田の頭の中に思いもかけなかった言葉が飛び込んできて、その言葉が彼を立ち止まらせた。

（夜のクロス）、岸上大作が風の強い日に恋人とデートしたのを詠んだ歌だ、でもその恋は彼の一方的かつ恣意的なものだったんだろう、とてもあんなやつがもてるとは思えない、哀しいことに。

（隣室の灯よ早く消えろ。君たちには、規則正しい生活が必要だ）そう皮肉を込めて書いた岸上は、二十一歳で百五十錠の睡眠薬を飲みロープを使って縊死した。彼が言った規則正しい生活、それにどれほどの価値があって、どれほどの安全性があるのかは知らない、守るべき生活、それは表面は青々とした若葉であったとしても、裏をめくれば徐々にそして確実に虫食まれていく朽葉であるかも知れないのだ。

（私の死体は群衆の中に交えて雨に打たせよ）あの頃、津田はこんな言葉をノートに書きつけていた。

（群衆の中に交えて・・・・）学生運動に染まっていた頃の彼はそれをどんなに願ったろう。欺瞞、しかし同時にそれは単なる彼の自己欺瞞でもあった。皮肉にも彼の持ち得たものは、いつも卑屈な反撥し合う力だけであった。

混み合う通路を抜けて駅ビルの外に出ると一旦立ち止まった、壁に凭れてなにかを待っていそうな、或いはただそんなふりをしているだけなのか、娘の穿いたピンクのショートパンツが目の端に飛び込んだ。京子は駅前の広場を出来るだけ人の流れに逆らうように、出来るだけ距離が長くなるように、斜めに横切って行く。短く切られた髪が、小気味良く動く彼女の足の律動と吹きつける風によって乱れた。

津田は不用意にも、目の前を行き過ぎる、ジーパンを穿いて黒髪をショートカットにし

た大学生らしい娘に声をかけようとした。でも津田の中にあるこだわりというか、彼の貯め込んだ教訓というやつがそれを妨げた。

言葉は津田の喉を通る前に消滅した。彼は打ちのめされた気分になった。

ずいぶん昔のことだけれど、大学生だった女の友人に、津田は彼女のことを敢えて恋人と呼んでいた、その恋人に電話したあとの手にした受話器の重さが手のひらに伝わり、苦い思いが瞬間的に蘇えった。津田はそのときの秘められた夜の匂いを嗅ぎ取り、久しぶりに昔の自分に会えた気がした。彼は自動的にこんな言葉を憶い出していた。

（私が人の口から発せられた言葉の一言一言をどんな風に受け止めているか、人はそれが全然解かっていない。）

この言葉は電話ボックスから彼女に電話した夜、一人下宿に戻ってからノートに走り書きしたものだ。

津田はその言葉が現わす記憶から逃れるように、雑踏の中に進み出た。向かってくる通行人を避けたり、肩を擦れ合ってよろけたりしながら広場を歩いて行った。縮れた髪の毛の臭い、混じり合った香水の臭いや焼け焦げた醤油の臭い、様々な臭いが浮遊する海流のように澱みがちに流れている。小柄でどこか茶目っ気のある瞳をしていた、首を傾げながら人の顔を覗き込む癖のあった彼女、そんな彼女と時々会っていた頃、津田は駅前の商店街にある小さな本屋から文庫本を買って来ては、下宿の四畳半に敷きっぱなしの蒲団にもぐり込んで読み耽った。田宮虎彦の「足摺岬」、大手拓次の「藍色の蟇」、国木田独歩の「武蔵野」などなど・・・・。テレビも新聞もなかった、あるのはアルバイト先の先輩からもらった五球スーパーの真空管ラジオだけだった。暖房器具もないので、真冬になると

茶碗に残された水の表面が薄く凍った。でも夜は彼にやさしかった、肌に触れる空気までもが今とは違っているように思える。もし今の彼があの時間に戻ったなら、とても退屈で耐えられないかも知れない、きっとそうなんだろう、でも彼はあの時間を取り戻したいと思った。でないと自分はこのまま窒息して、ただ徒に干からびて行くだけだと思った。どうしたら取り戻せるのだろう、あの濃密な夜の深い息遣いを。

靴底に広場の冷たい刺激を感じながら、津田は同じ歩調で歩き続けた。あの時間を、あの夜を探し求めに行く、それはこんなことなのかも知れない。その場所はきっとあるに違いない、いや僕は実際にそこに行ったことがある、そう言われ続けている幻のビーチを探しに行くようなものかも知れない。気軽な衝動でオンボロ車に数日分の着替えとテントを積んで出かける、散々道に迷った挙句、やっと人影のない小さなビーチに辿り着く、浜辺で二・三日暮らしていると、ここが実は求めていたビーチではなく、観光客にも相手にされない単なる時代の波に取り残された砂浜に過ぎないような気がしてくる、そしてまた車を走らせて別のビーチを探し当てる、そこでも数日暮らした挙句また同じ感慨が起こってくる、そしてまた探す旅に出る、予定していた期日はとっくに過ぎて、着ていた服も変わり、肌の色も変わってくる、見知らない海岸線を辿って段々と奥深くに入り込んで行く、そしてどこかで、もう元の場所には戻れないことを自覚する。元の生活には戻れない、そんな自分になってしまっている事実を発見する。

砂浜とは、似てはいるがいつもどこか違っているものだ。

誰もいない夜の児童文学研究室、淋しく燈った蛍光燈の姿が暗く滑らかな窓硝子の表面に映っている、書棚に囲まれた部屋の中央に、ふだんサークル仲間が議論を戦わす広いテ

ーブルが置かれている、今は京子一人がテーブルの端にひっそりと座っている。
乗り換え駅まで行ったあと京子は大学に戻った、そして研究室にいるに違いない数人のサークル仲間がいなくなるまで、校内をぶらぶら移動しながら時間を潰した。
駅前の広場の端に立って京子はこう思ったのだ、この広場の端から端まで斜めに歩いて行こう、この限られた距離を進んで行く内に、もし誰かが、この流れ狂う人の群れの中の誰かが私に声をかけたら、そしたら今日これからやろうとしていることを止めよう。京子はかって見た映画の一場面を憶い出していた。主人公の男が水の抜かれた湯治場のプールを、蝋燭の光をかかげたまま端から端まで何度も往復するのだ、火を消さずに端まで辿り着ければ世界は救済される、そのために彼は何度も試みる、そしてやっと火を燈したまま辿り着く、このことははたから見れば愚かしく意味のない行為だ、でも彼個人にとっては世界の破滅を賭けた行為であるのだ。自分の身にかかわる意志決定をこんな遊戯めいた偶然の所産に委ねる、それこそが今の自分にふさわしいと思った。あの男は何度も試みたけれど、私の行為はたった一度きりのものだ、京子は見えない蝋燭の火をかかげて、交錯する人の流れの中を進んで行った。
頃合の時刻を見計らって京子は七階にある研究室のドアを開けた、誰もいなかったが電燈は空しく燈されたままだった、そのあと京子はテーブルの隅に座ると一人で本を読んだ、京子にとっては久しぶりに、本当に久しぶりに訪れた落ち着いて充足した時間だった。
不意に、足音もせずに、どこから現われたのかも解からない守衛が声をかける、暗い廊下に面したドアを半開きにして、身体を半分乗り出すようにしてこちらを見ている。
「もう遅いから帰りなさい。」
京子は一瞬振り向くと、無言のまま無視するように部屋の奥の暗い硝子窓に視線を戻す。
（だるまさんとにらめっこ）京子は頭の中で呟く。守衛は音もなく姿を消した。あとには閉じられたままのドアだけが残っている。そしてしばらくのあと、京子は椅子から立ち上がると、硝子窓を大きく開けた。窓枠を掴んでよじ登ると、窓に腰を沈めたまま、一瞬

後ろにあるテーブルを振り返った。そしてすぐさまコンクリートの地面に向かって飛び降りた。コートのポケットには一冊の文庫本と、（解剖なんてまっぴらだ）と書いた紙切れが仕舞われていた。

何故か次の日も仕事が早く終わった。三日も続くなんてここ数年なかったことだ。何列も並んだ長いデスクの端にある自分の座席を離れると、エレベーターで一階に降りた。扉が開いて廊下に一歩足を踏み入れたとき、津田はふと軽い尿意を感じた。会社を出る前に済ませておこうと思って、一階の廊下の奥にあるトイレに立ち寄った。ふだんは幾ら遅くなっても正面玄関からしか出ないのに、トイレに近い廊下の突き当たりに裏口があったので、そのときはたまたま近くにあった裏口から外に出た。

日が暮れて行く、今日も高木はその時刻になるのを静かに待っている、こうしてむしろ平然と日をすり減らして行く自分を思うと、こんなはずではなかったという思いと、いや自分は確かにこうなることを予見していたのだ、無為に流れてしまう生活、それを心のどこかで解かっていたはずだという思いが微妙に混ざり合った。高木が願っていた、自分がしたいことしかしない純粋で単純であるはずの生活も、今や完全に破綻し終焉していた。いつものように高木は五階にあるマンションの硝子戸から工事現場の作業員たちが帰宅するのを眺める、単純な労働へのあこがれ、今の高木にはそれすらも信じられなかった、今では単純そうな姿の裏に秘められた苦しい虚偽が見えてしまうのだ。あの作業員たちにも隠された苦しみや鬱陶しさがあるのだ。むしろ無為であるべきなのだ、今ではそう思えた。でも、どうしても、陽が沈んだばかりの閑散とした路地に彼等がちりぢりになり、ゆったりとした足取りで帰って行く、充足したように見えるそのうしろ姿を追ってしまう、毎日がそうだ。

高木は夕暮れの散歩に出る、同じ舗道を歩き、坂の多い同じ道を登り下りする、そして最後にいつもの坂を下りきったあと、大聖堂の伽藍を中心に巨大な石造建築が周囲を取り巻く円形の広場に足を踏み入れる、それがいつものお定まりのコースだ。

いつもと違う坂道があって、津田は通ったことのない道なのでおおよその見当をつけて

歩いて行った。家並の向こうには薄明かりの残る夕暮れどきの空が懸かっていた。近くにこんな店があったのかと、小さな気取った料理店や派手な赤い暖簾を垂らしたラーメン屋を歩きながら眺めた。この辺りでいいだろうと思って角を曲がると、また別な坂道が現われた。狭い坂を車が行き交い、人々は時折後ろを振り返りながら坂の両端に分かれて歩いていた。数歩づつ間隔を空けて続く人の列に入ると、津田は自分の数歩前を歩く黄色いスーツの背中を見ながら坂を下って行った。多分若い女性が着ているのだろう、その黄色い固まりが暮れて行く藍色の空に滲んだかと思うと、小刻みに揺れ始めた。またかと思って気付いたときには、あのぬめぬめとした感触が体中を這い上がっていた。ようやく坂を下りきって、いつもの坂下に合流するはずだと思って歩道橋のある方向を見ると、津田は茫然とした。狭い坂道を抜けた先には、いつもあるはずの歩道橋がなくて、今まで見たこともない大きな円形広場が広がっていた。津田は歩度を緩めて慎重に足を進めた。無人の広場に、その円形の中に一歩足を踏み入れた途端、津田は中世の街の一画全体が完全な姿のまま廃墟となって、蒼暗く澄んだ水底に沈んでいるような錯覚に捉えられた。津田はまざまざとそうした情景を見た。摩耗して亜鉛のような鈍い艶を帯びた敷石が、同心円を描いて広場の隅々にまで敷き詰められていた。広々とした空間を取り巻く、大聖堂か議事堂を思わせる巨大な石造建築たち。飛梁や尖塔を持ち、幾何学的な窓格子に区切られた色硝子が連なっている。建物の向こうに見える陽が沈んでからまだ間のない空は未だ薄明るさが滲み、均一な密度を保った奥深い蒼さが浸透していた。津田は自分の吐く息や、体を包む空気そのものまでが、澄き透った藍色に染まっているのを見た。

広場の端に立ちすくんだまま、津田は思わず叫んだ。

「市民よどこに行ったのだ。」

「市民よ・・・・」、こんな言葉が突然自分の口をついて出たことに、津田は意外な思いがした。とんでもないと思った。今まで市民などという言葉とは無縁であったし、自分はその言葉が現わす正体不明の捉えどころのない観念とは対極の位置にいると思っていた。自分はどうかしてしまったのだろうか。

津田は滲んだ空を見、アーチの付いた高い窓を見、広々と続く敷石を見た。

しばらく経ってから、津田は無人の広場の中心に、敷き詰められた石畳の底の方から仄かな明かりの立ち昇っているのを見つけた。彼は薄闇の空気を伝う黄ばんだ明かりに向かって、引かれるように進んで行った。そして、広場の中心まで来ると立ち止まって足元を見た。

石畳を切り取ったようにぽっかりと空いた矩形の空間があって、路面と地続きの空間の表面は透明なアクリルか何かで覆われている。空間は眩いほどの黄味がかった光に照らされていた。光は空間の内部に満ち溢れていた。そこには正確に縮小された、純白に塗られた書棚が幾つもあった。だがそこにあるはずの書物は、すべて持ち出されてどこにもなかった。

俯いて地面の底にある光を見つめながら、津田は畸妙にも、かってこの広場で行われた独裁者による焚書を実感していた。沸き上がる炎の中に次々と投げ込まれる書物、そのたびに炎は悲鳴に似た歓喜に身悶え、火の粉の息吹きを夜空に向かって吹き上げた。炎に向かって列を成す市民たち。家から持ち出した書物を投げ込む大人や子供の顔には、遊びに興じるときのような薄ら笑いさえ浮かんでいる。

舗石の敷き詰められた広場の中央に出ると、いつもそうするように蒼暗く沈んだ空に翼を広げた大聖堂を見上げた。高い窓に嵌められた色硝子の、奥深い沈んだ色合いが気に入っていた。そのあといつも通りの手順で、高木は広場の周囲を巡る円柱の立ち並ぶ廊下を伝って歩いた。ほぼ半周ほどしたあと、一本の円柱に凭れると薄闇にまぎれるようにして体を休めていた。冷たい石の感触が高木の背を伝って這い上がってくる。ふと首を横に向けると、誰かがだだっ広い広場の中心に立って、うな垂れるようにして足元を見つめていた。足元の地面からは黄味がかった淡い光が真っ直ぐに立ち昇っていた。(葬送)、そんな言葉が高木の脳裡をかすめた、(足元に空いた自分の墓穴を見つめる男)、高木は見てはいけない個人的な秘事を目の当たりにしているようで、思わず柱の後ろに隠れようとした。その瞬間、今まで背を向けて立っていた男が、突然振り返って高木の方を見た。

背後になにかが蠢くのを感じたのか、津田は突然振り返った。蒼く沈んだ闇の層を透して、おぼろげに身を溶かす円柱の姿を見た。津田は列柱の奥に、逃げるように走り去る人影を見たように思った。だがそこにあった薄闇に滲んだ蒼鉛色の影は、彼の描いた幻だったかも知れない。目を凝らして見たがそのときは誰もいなかった。それは彼の中に渦巻いていた、誰かがいて欲しいという、不安とわずかばかりの期待が生み出した幻影だったのだろうか。

あの目は途惑ってはいるが絶望し切った人間の目ではなかった、あの目は諦めていない目だ、あいつはきっと自分をごまかして、或いは平気で自分と折り合いをつけて、この差し迫った事態を上手く擦り抜けるに違いない、あいつは回避するだろう。もの音も立てずに、柱の蔭から逃げ出すとき、高木は直感的にそう思った。そして、あの男の目に、かって自分がしていた目付きを見たように思った。

津田は重々しく沈黙する列柱に向かって再び叫んだ。

「市民よどこに行ったのだ。」

そのとき津田は無意識の内に、あれほど無関係と思っていた市民と繋がりを持とうとし

ていたのか、そしてそのことは次に来る彼の中の変化を準備するものだった。
沈黙に包まれたまま薄闇に潜み続ける列柱に背を向けると、津田は再び足元の光に視線を落とした。彼は目の前にある四角い穴を自分のためのものと言うより、誰のためでもあり、誰のためでもない、曖昧な市民という概念のために用意されたものへと転化させようとしていた。それがうまく行きさえすればこの穴の存在は弱まり、薄れて行くのだ。だがそうは行かなかった、穴は厳然として彼の前に存在し、彼に語りかけていた。
地面に穿たれた自分の内臓とでも言うべき小さな空間。津田はそこに自分の一生の縮図を見た。長くもなかった自分の一生のなれの果てというか、帰結を見てしまった。きっとそうなるに違いない、こうして日々をすり減らして終わって行く自分の姿が横たわっているのを見た。
或いはこんなことも考えられる、津田はふと思い立った。穴の中に詰まっていたものが人類の過去の記憶そのものだとしたら、そのすべてだとしたら。その考えは津田個人に向けられた問いかけから彼を解き放つ効果がある反面、彼をぞっとさせた。その考えは余りにも恐ろしいので考えるのを止めた。こんな目に会うのは自分一人で充分なのだ。
（この空間は、いつ誰の前に出没するのか）、新たな疑問が津田の脳裡に閃いた。身勝手な彼は、又しても、広場に出現した空間が誰のためのものなのかを推し量ろうとして自問した。こんな空間などふだんはきっと無いに違いない、ふだんは無数の靴底で踏みつけられるただの石畳であるに違いない。彼は自分自身に向かって提示された印しを、誰のためのものかなどと、はぐらかそうとしていたし、違う時間、違う人の前にも、この同じ空間が現われるに違いないと思い込もうとした。確かにそんなことも考えられないでもなかった。しかし、からになって白一色に塗られた書棚、かっては書棚に満ちていて今は失われてしまった言葉たち、その姿は死の瞬間に臨む彼自身の姿を歴然と現わしていた。
津田はマンションの一隅にある自宅に戻ると夕食をとった。とうの昔に妻は家事を止めてしまっているので、毎日そうしているように、近所のコンビニで弁当を買って来てキッチンのテーブルで一人で食べた。半分ほど食べると途中で止めて、キッチンの隣りにある

座敷に移動し、新聞を畳の上に広げて読む。まず朝刊を見て、それから夕刊を見る、そして大量にあるチラシを丁寧に半分に折り畳んで行く、それがいつとはなく決められた手順だ。夕刊をめくっていたとき、何気なく紙面の片隅にある小さな記事が目に付いた。

（女子大生飛び降り自殺、動機は不明、警察で調査中、研究室のテーブルの上に死の直前まで読んでいたと思われる一冊の本が、ページを開いたまま置かれていた。）

一冊の本に引かれながら、未練を残しながら飛び降りたのだろうか、それとも諦めて、どうなるものでもないと思いながら飛び降りたのだろうか。（もう死なせて）そんな言葉が津田の頭の中になんの抵抗もなくするりと忍び込んで、大きく立ち現われた。飛び降りる間際に、彼女は無言のままじっと動かないページに向かって、そう呟いたのかも知れない。当然のことながらその場にあった一冊の本は、世の中に存在する、或いは存在したすべての書物を表象していたはずだ。すべての知識に対して見切りをつけて、或いは許しを乞いながら飛び降りたのだろうか。

（もう死なせて）、その言葉が妙に今夜の津田の気持にまとわりついた。

（そうだ、あのとき目が会ったんだ）、津田は新聞の端を掴んだまま紙面から目を離すと、ふと思った。津田は柱廊の奥に潜んでいた男と一瞬目が会っていたのを、このときになって憶い出した。一瞬、薄闇の向こうに映った淋しい目の煌きや、ぎこちない足取りで慌てて立ち去る影からそう感じたのか、津田は何故かその男のことを、夕暮れどきに一人でうろつくしか能のない哀れな男に思えた。

その後も、津田は毎日坂を登り、坂を下りして暮らしている。以前となにも変わらない

生活。今、冷たいアスファルトの路面を踏んで下って行っても、あのどこかに入り込んで行くような感覚は無くなっている。でもいつか、またあのぬるぬるとした感触が顔を出して、広場の片隅に吸い込まれて行くのではないかと、いつも思っている。